

# 二〇一〇年度 国語

(五十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

高一本

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちの近代——現代社会は、自然と人間の関係からみれば、自然の制約を受けない経済活動や暮らしの創造をめざしてきた。自然に影響される経済活動や暮らしのかたちを古いものとみなし、自然から「自由」な人間の活動を<sup>A</sup>カクリツしようとしたのである。

そのもっとも大きな理由は、自然の制約下にあったのでは、安定した経済活動を展開できないというところにあった。だがそれだけでもない。というのは、もうひとつ、自然は「不平等」なものとして展開されている、という問題があったからである。

(Ⅰ) 日本をみても、冬には雪や氷に閉ざされる地域があるかと思うと、真冬でも水田では稲の育つ沖縄の島々などがある。しばしば豪雨にみまわれる地域や、洪水、崖崩れの常習地帯があるかと思えば、雨の少なさに悩まされる地域もあって、成長の早い森も遅い森もあるように、自然はけっして平等には展開していない。

自然に制約された労働や暮らしとは、視点を変えれば、この自然条件の「不平等」を甘受することであった。そして伝統的なその地域特有の暮らしの文化は、この「不平等」を地域の特徴や、ときに利点にまで高めることによって形成されてきた。

私たちの近代から現代にかけての歴史は、<sup>①</sup>この構造を打ち破ろうとしてきたのである。一方では「古い」地域の<sup>B</sup>トクチョウはとり払われ、社会の共通化がはかられてきた。そして、それを可能にするためにも、自然の<sup>C</sup>セイギョと改造がすすめられた。

(Ⅱ) 今日とは、このような歴史の流れの転換点にたっているのだろうかと思う。

現在の自然や森に対する関心の高まりは、とりあえず、人間の生存のために必要な自然や森を、これ以上こわすことなく守っていかうという気持ちからはじまった。そしてこの動きは、その立場にとどまることなく、次第に現代文明そのものを見直そうとする意識と結びついていった。

そのとき私たちは、<sup>②</sup>自然の「不平等」を受け入れた「平等」な社会のかたちを、構想しなければならなくなったのである。すべてを<sup>X</sup>化し、<sup>Y</sup>化しながらすすんできた近代的な市民社会の歴史を、地域ごとに異なる自然と人間が結びあえる多元的な社会につくり変えながら、その多元性を保証する「平等」な社会の創造が、私たちの課題になった。

これまでの歴史が、すべてを同じ条件下に変えることによって平等をめざしてきたとすれば、これからの歴史は、自然の「不平等」を受け入れ、そのことによってその地域特有の自然と人間の文化をつくりだしながら、同時に平等でもあるような社会の創造をめざしていかなければならぬだろう。そうでなければ私たちは、その地域社会と結びついた多様な森を守ることができないのである。

そしてそれは、言うまでもなく、都市と農山村に暮らし人々の共同の仕事である。ここに新しい人間の交流のかたちが求められている。

実際最近では、都市の文化と森とともに暮らす人々の文化が、お互いを補いあいながら連帯していくべきだと考える、<sup>③</sup>新しい交流が各地で生まれてきた。森を守るためには、山村的な暮らしや労働を支えていかなければならない、という気運も高まってきた。

自然を守る運動は、はじめはその破壊に対する告発からはじまり、次に自然を守るための規制を要求するようになる。(Ⅲ) その地点でとどまっていることも、また許されない。(Ⅳ) 自然を破壊するものは、具体的契機としては、開発や自然の改造であるとしても、その基礎には、私たちの近代から現代にかけての歴史と、その精神がよこたわっているからである。

だから私は人間の理性の力で森を守ろうとすることにも躊躇する。今日の人間の理性とは、<sup>④</sup>現代社会の精神と分かち

# 二〇一〇年度 国語

(五十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

高一本

がたいものでしかない。

おそらく森は、人間たちの営みの確かさをおしてしか守れないであろう。森とともに暮らす人々の営み、森で働く人々の営み、そしてそんな人々を支えていく私たちの営み。そのさまざまな営みが、永遠にジュンカン<sup>D</sup>しつづけるように展開していく森の時空とともにあるとき、森は永遠である。

(内山節「森にかよう道」より)

問一 傍線部A～Dのカタカナを漢字に改めなさい。

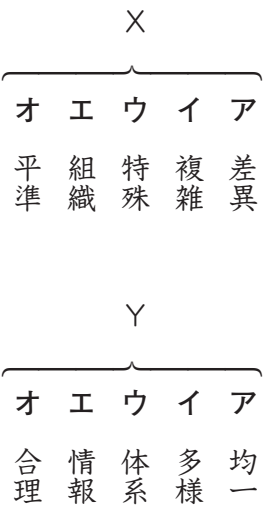
問二 空欄Ⅰ～Ⅳに入る最も適切な語を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア だから                    イ だが                    ウ つまり                    エ なぜなら  
オ たとえば                カ そして                キ おそらく

問三 傍線部①「この構造」が指すものは何か。それを端的に表した箇所を本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問四 傍線部②「自然の『不平等』を受け入れた『平等』な社会のかたち」とはどのようなものか。本文中の言葉を用いて、五十字以内で答えなさい。

問五 空欄X・Yに入る最も適切な語を次の語群からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。



問六 傍線部③とあるが、これらの「新しい交流」をとおして私たちがめざしていることは何か。具体的に述べた箇所を本文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問七 傍線部④にある「現代社会の精神」とは何か。最も適切なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間の自由な活動を保証する社会の共通化を進めるために、多元的な自然や文化の視点に立とうとすること。  
イ 自然の制約下で暮らす人々の暮らしを守り、伝統的な暮らしの文化や自然を保存しようとする事。  
ウ 自然と人間を対立的な構造の中でとらえ、その自然の束縛から解放された自由な人間の活動を求めようとする事。  
エ 人間の理性の力によって、自然の「不平等」を一律に平等化することに疑問を感じるということ。  
オ 自然のあり方を尊重し、人間が自然のおもむく方向に歩み寄ることで自然の恵みを受けて共存すること。

# 二〇一〇年度 国語

(五十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

高一本

二 次 の 文 章 を 読 ん で、 後 の 問 い に 答 え な さ い。

客は利休ひとりである。彼の大きな眼は、秀吉の操作のすべてをじっと見守った。それも大きい口の厚い唇は、頬の片側に窪みをつくって閉じていた。利休は瞬きもしなかった。なにかの注意や指図がなされることもなかった。黒い十徳の膝には、大きいからだ、大きい眼口に釣りあって大きい皺のよった両手が、ホリつけられたようにのっている。むしろ彼そのものが、釜の発する、なにか遠い山野からのような幽かなさわやいだびびきの中に、一箇の木像のごとく、

X と 厳 かに 見 えた。

秀吉が一種えたいの知れない Y に 捉 え ら れ る の は、 この 瞬 間 である。① 自 分 の 輝 き が 急 に き え、 影 の う す い、 見 す ば ら し い も の に な っ た 気 が す る。 そ こ に た だ 黙 っ て 座 っ て い る も の か ら 来 る、 抵 抗 し が た い 威 圧 であ っ た。

(I) たて 終 わ っ た 茶 を 型 通 り 利 休 の ま え に 運 び、 そ れ が 飲 み ほ さ れ、 茶 碗 が ひ か れ、 後 始 末 が す む と い っ し よ に、 ③ 秀 吉 は 失 わ れ た 権 威 を よ う や く 取 り 戻 す。 利 休 は い ち 早 く 身 を お こ し、 錦 の 小 型 の し と ね を 上 座 に お い て 彼 を 迎 え る。 秀 吉 は も う に こ や か な 笑 顔 である。 戦 塵 か ら し ば ら く 遠 ざ か っ て い る た め に ひ ろ い 額 は 白 く、 や や 張 っ た 頬 の 下 部 も 健 康 そ う な 肉 づ き で、 信 長 が 渾 名 し た 「 禿 げ 鼠 」 の 面 影 は み じ ん 残 っ て い な い。 た だ 昔 な が ら の、 切 れ こ み の 深 い ふ た 皮 験 の 眼 尻 に 皺 が 見 え て も、 惣 髪 で、 頭 蓋 の 中 央 に、 短 い 棒 の ご と く に 結 い あ げ た 髪 の 毛 は ま だ 黒 い。 立 身 す る ほ ど 身 だ し な み に 気 を つ か い、 ハ デ 好 み の お 洒 落 に な っ た 秀 吉 は、 白 髪 は 伸 び な い よ う に 抜 か せ る の である。 そ れ に 小 柄 な 中 肉 で 年 齢 よ り は 活 き 活 き と し て い た。 こ と に 法 体 で 黒 ず く め の 利 休 に く ら べ る と、 カ ビ な 装 い も 手 伝 い、 一 と ま わ り に な お 二 つ 上 ち が う ふ た り は、 老 い た る 伯 父 と 甥 く ら い に し か 見 え か ね な い が、 通 い 口 に 位 置 を か え た 利 休 へ 投 げ か け る 秀 吉 の 視 線 に も、 そ の 間 柄 に 似 た よ う な ど こ か 甘 え た 親 愛 が あ っ た。

⑤ 秀 吉 は わ ざ と な に 気 な い ふ う に き り だ す。

「 あ ん な 工 合 で よ か っ た か な 。」

利休は大きな眼いっばいに微笑を浮かべる。秀吉の点前を見守っていた顔つきとはがらりと変わって、こんな時の利休はなかなかの愛嬌者に見える。が、⑥ 答 え は ほ ん の 一 音 であ っ た。

「 ま あ 。」

でない時でも「まあ、まあ。」で、それ以上くさしもしない代わり、賞めもしなかった。

利休はつねにこれで通したのだから、どんな批評をされるかは、秀吉にも前もってわかっていたはずである。にもかかわらずやっぱりたずねて見ないではいられないのは、ほかの茶頭たちなら、津田宗及にしる、今井宗久にしる、惜しみなく浴びせるであろう賞賛はへつらいに過ぎないのを知っており、それ故にこそ、ほんのかりそめにも満足のいく言葉を、利休の口からききたいのであった。稽古ことでは誰にもおきる子供っぽい気持ちも、秀吉の場合は、得がたいものほど無理にも得ようとする権威者の Z に 裏 付 け ら れ て い る の で、「 ま あ 。」 や 「 ま あ、 ま あ 。」 で か た づ け ら れ る の が 口 惜 し か っ た。

つづいて秀吉が客になり、利休にたてさせる。もう一度学ぼうとするより、⑦ この 命 令 に は い く 分 あ ら 探 し が 隠 さ れ て い な く は な い。 利 休 の ほ う は 知 ら ぬ ふ り で は じ め る。 た っ た 今 秀 吉 が 行 っ た 通 り の 仕 方 と 手 順 で 道 具 も そ の ま ま な の は い う ま で も な い。 た だ 違 う の は、 道 具 の ひ と つ ひ と つ が 利 休 の 手 の 触 れ る の を 待 っ て お り、 彼 が 取 り 上 げ る と い う よ り、 道 具 の 方 か ら そ れ ぞ れ に 動 い て 運 び を つ く っ て い く 感 じ であ っ た。 利 休 の こ う し た 点 前 に く ら ぶ れ ば 他 の 茶 頭 た ち は 真 似 ご と を し て い る に 近 か っ た。 秀 吉 の ひ そ か な 監 視 は、 し だ い に ジ ャ ン ス イ な 感 嘆、 満 足 に か わ っ て い く。 こ れ ほ ど の 男 を 勝 手 に で き る 誇 り が、 あ ら た に 強 ま る の も こ ん な 時 である。

(野上彌生子「秀吉と利休」より)

# 二〇一〇年度 国語

(五十分)

答えはすべて **解答用紙** に書き入れること。

高一本

注 十徳——室町・江戸時代の衣服の一種。

釜——茶道で用いる湯を沸かす道具。

しとね——敷物。ふとん。

戦塵——戦場に立つちりやほこり。

ふた皮瞼——ふたえまぶた。

惣髪——髪全体を伸ばして後ろでたばねる髪型。

法体——出家した僧侶の姿。

点前——茶の湯の作法。

茶頭——茶事をつかさどるかしら。

問一 傍線部A～Dのカタカナを漢字に改めなさい。

問二 空欄X～Zに入る最も適切な語を次の語群からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- |   |          |        |
|---|----------|--------|
| X | A 安穩     | イ 平然   |
|   | ウ 荒涼     | エ 寂寞   |
| Y | A 気おくれ   | イ 畏敬の念 |
|   | ウ 不安な心持ち | エ 恐ろしさ |
| Z | A 自信     | イ 我意   |
|   | ウ 威厳     | エ 余裕   |

問三 傍線部①「自分の輝き」の内容を表している語(二字)、傍線部②「黙って座っているもの」を比喩的に表した語(五字)を、本文中からそれぞれ抜き出しなさい。

問四 空欄Iに入る最も適切な語を、次から選び、記号で答えなさい。

- A だから    イ しかし    ウ つまり    エ そこで    オ もはや

問五 傍線部③・⑥・⑦はどうか。次からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

③ 秀吉は失われた権威をようやく取り戻す。

A 秀吉が利休の抵抗しがたい威圧に勝ったから。

イ 茶道の世界から通常の人間関係に戻ったから。

ウ 権威の喪失は気のせいだと分かったから。

エ 利休が茶を飲みほしたので安心したから。

⑥ 答えはほんの一言であった。

A 秀吉の権力を恐れていたから。

イ 秀吉の点前があまりに味気なかったから。

ウ 秀吉に茶人として真剣に接しようと思うから。

エ 秀吉を素直にほめるのが悔しいから。

⑦ この命令にはいく分あら探しが隠されていなくはない。

- ア 自分の点前を一言で片付けられた悔しさを晴らすため。
- イ 自分の権威者としての立場を利休に納得させるため。
- ウ 自分を賞賛しない利休の尊大な態度を改めさせるため。
- エ 自分の茶道における優位性を利休に分からせるため。

問六 傍線部④「甘えた親愛」が秀吉の心に生じるのはなぜか。本文中の言葉を用いて、十字程度で答えなさい。

問七 傍線部⑤「秀吉はわざとなに気ないふうにきりだす」とあるが、このようにきりだしたのは、秀吉が利休に何を知られたくなかったからか。四十字以内で答えなさい。

問八 本文に描かれた秀吉と利休の人間関係として最も適当なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 茶道の第一人者としての秀吉を威圧する利休と、そんな利休を権威で圧倒する秀吉。
- イ 茶道の師匠として秀吉にへつらわぬ利休と、社会的権力で利休を圧倒する秀吉。
- ウ 社会的には上位にある秀吉を人間的に圧倒する利休と、茶人・利休に感嘆する秀吉。
- エ 秀吉の権力へつらわぬ利休と利休のかたくなさに満足を感じる秀吉。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

\*能因入道、伊予守実綱に伴ひて、かの国に下りたりけるに、夏の始め、日久しく照りて、民の嘆き浅からざるに、神は和歌に①めでさせ給ふものなり。試みに、詠みて三島に奉るべきよしを、国司しきりに勧めければ、

②天の川苗代水にせき下せ天下ります神ならば神

と詠めるを、みてぐらに書きて、社司して申し上げたりければ、炎旱の天にはかに曇りわたりて、大きな雨降り手、枯れたる稲葉おしなべて緑に③かへりにけり。たちまちに天災をやはらぐるごと、唐の貞観の帝の、蝗を飲めりける政にも劣らざりけり。

能因は、いたれるすき者にてありければ、

都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関

と詠めるを、都にありながら、この歌を④出ださむこと⑤念なしと思ひて、人にも知られず久しく籠りゐて、⑥色を黒く日に当たりなして後、「陸奥国のかたへ、修行の次に詠みたり」とぞ披露し侍りける。

(『古今著聞集』巻五「能因法師詠歌して祈雨の事。並びに白河の関の歌の事」より)

注 能因——平安中期の歌僧。

三島——愛媛県にある大山祇神社。

みてぐら——幣帛。神に供える布・紙。

炎旱——日照り。

唐の貞観の帝——唐の太宗。李世民。日照りで蝗が大発生した際、蝗を飲んで、日照りを止めたと伝わる。

白河——福島県白河市付近。

# 二〇一〇年度 国語

(五十分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

高一本

問一 傍線部①「めで」、⑤「念なし」の意味として適当なものを次の語群からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① めで
- ア ほめる                      イ 愛する                      ウ 心ひかれる                      エ 堪能である
- ⑤ 念なし
- ア 残念だ                      イ 意外だ                      ウ 祈念しない                      エ すばらしい

問二 傍線部②「天の川苗代水にせき下せ」とあるが、この祈念はどのように実現したか。それを示す言葉を本文中から八字以内で抜き出しなさい。

問三 傍線部③「かへりにけり」、④「いださむこと」を現代仮名遣いに直しなさい。

問四 本文によれば「都をば」の歌はどのような歌か。最も適当なものを次のうちから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 能因が都から白河への途中で詠んだ歌である。
- イ 能因が白河の関にたどり着いて詠んだ歌である。
- ウ 能因が白河から都に戻った後で詠んだ歌である。
- エ 能因が修行の旅とは関係なく都で詠んだ歌である。

問五 傍線部⑥「色を黒く日に当たりなして」とあるが、なぜこうしたのか。二十字程度で答えなさい。

問六 本文で能因はどのような人物として描かれているか、二十字以内で簡潔に答えなさい。

